

てこな・ミュージック・ジャーナル



井上ひさし

井上ひさしさんと音楽

～第1回井上ひさしの世界in市川2010にちなんで～

日本を代表する作家でこまつ座の主宰者であり、そして市川市文化振興財団の理事長だった井上ひさしさんがお亡くなりになってすでに7ヶ月近くたってしまいました。11月16日は76歳のお誕生日をお迎えになられるはずでしたので、今回は、戯曲でいつも役者さんたちが踊り歌うという井上劇の構想は、井上さんがとりわけ音楽を愛していたからだとお話をさせていただきたいと思っています。先日、料理研究家の奥様のユリさんとお話をさせていただきましたが、井上さんはハーモニカがとてもお上手だったそうです。単音ではなく、伴奏をつけながらの本格的な演奏で、そのお兄さまはギター音楽を作曲なさったそうですし、お父さまはいつもレコードでガーシュウィンなどをお聞きになっていたそうですから、音楽の才能に恵まれたご一家だったということでしょう。



劇中歌

こまつ座の戯曲には、音楽がこごとというところから出てきます。戦争、あるいは運命に翻弄される人間の悲惨といった劇内容は、涙とそして時に笑いを救いとする、井上さん独特のペースにあふれるものですが、でも役者さんが立ち上がって歌いだすと、それまでの消沈していた暗い気分が一変、人生なんとかなるさといったエネルギーが舞台に広がり、会場が明るくなって、井上劇の本当に魅力的なひと時となるのです。

井上ひさしさんの劇中音楽にとて魅了される一人として、「井上ひさしの世界in市川」開催のために、先生の書斎にある数多くのCDを拝見、そしてその一部を拝借させていただきました。井上さんが劇中音楽構想のためであっても、でもお好きでお聞きになっていた音楽のことをみなさまにお話させていただきたいと思います。

音楽の効果

2003年に初演された「兄おとうと」は「日本デモクラシーの先達」を描いた劇ですが、こまつ座の季刊誌「the 座」の中の対談で作曲家宇野誠一郎さんが次のようにお話になっています。歌が多いのでミュージカルですかと問われるということに対して、「ミュージカルは、日常では使わないいわゆる訓練された声で歌うもの。井上さんの芝居は、歌や踊りはあるけれど、音楽という役割を通して、登場人物の心のひだをより鮮明に伝えていくためのもの。。。。極端なことを言えば、声を揃えるより、そこに登場している人物の生命そのものを際立たせることを優先するものだと思いますね。」「セリフはなるべく日常の声に近いほうがいいですね」とも仰っていらっしゃいます。そしてまた宇野さんは「井上さんのお芝居は、ある秩序から始まって、お客さんが

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

その秩序に慣れたところに破壊が起こり、それが再生して新しい秩序、進化した秩序を生み出していく。。。音楽は基本的に秩序の部分を担当するわけです。。。劇場という密閉された空間の中に座って、舞台を見ているお客さんに、俳優たちの言葉による台詞や演技という身体表現以外に、ある波動を通して共鳴や共振を起こすという役割が舞台音楽にあるのです」といったようなことをお話になっています。

シューベルト、チャイコフスキー、ドヴォルザーク、ガーシュウィン、クルト・ワイル

宇野さんのお話は、まさに井上劇の大きな魅力のひとつが劇中音楽であることを語っていますが、では井上さんは劇中音楽として、どのようなものを選ばれているのかを、ちょっとご紹介してみましょ。

たとえば「兄おとうと」で使われている音楽で、宇野さんのものではないものに、シューベルトの「幸福」、ドヴォルザークの「ユーモレスク」、ガーシュウィンの「ストライク・アップ・ザ・バンド」、ダニエルフの「ティティナ」、宇野さんの作品では「水玉たまれ」「月娘」「会いたかったぜ」があり、チャーホフを題材にした「ロマンス」で使われているのは、ガーシュウィンの「Do Do Do」、チャイコフスキーの「ロマンス第6番 ただ憧れを知るものだけが」、「ロマンス第5番 Why?」「ロマンス 第2番 信じるな わが友」、リチャード・ロジャース「There is small Hotel」、「Sing for your Supper」、そして宇野さんの「タバコのワルツ ひょっこりひょうたん島より」があります。

劇中歌は井上さんと宇野さんが話し合って作りあげたものが多いのは確かでしょうけれども、でも井上さんは本当に音楽をお好きだったと奥様が仰っていました。書斎にはたくさんCDがいくつものラックの中に入っていて、もっとも目についたのはガーシュウィンで、「ラブソフィー・インブルー」が入ったものだけで何枚もありました。ラフマニノフのピアノコンチェルト、クルト・ワイルの「三文オペラ」などなど。そして美空ひばり、ちあきなおみも大好きと奥様は笑いながらお話ししてくださいました。

CDをかけながら劇を構想なさったのでしょうか。。。

書斎のCDの中にあつた、1973年と78年にニューヨークで録音されたガーシュウィン・ベストピアノ・ソング集。CD裏の曲目には、黒のサインペンで記しが付けられています。●、◎、一、△が付けられているものもあります。◎は3つの前奏曲の雙八短調。そしてもう一枚、1992年8月ロサンジェルス録音の傑作ガーシュウィンのミュージカル「レディー・ビー・グッド」では「ハンク・オン・トゥー・ミー」「ジュアニータ」「レブリーゼス」「リトル・ジャズ・バード」に印をつけていらっしゃいます。奥様が仰いますように、メモ程度のおつもりだったかもしれませんが、印の重要度は戯曲と照らし合わせて、初めて明らかになるものかもしれません。ハーモニカがお得意で音楽を愛された井上さん、その井上さんの作品を音楽とともに味わえるようなコンサートができればと思っています。

過去のてこな・ミュージック・ジャーナルはHP「てこなどっと ねっと」<http://www.tekona.net/>でご覧になれます。